

---

# シンデレラ無双

アマノン ジャック

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シンデレラ無双

### 【コード】

N6365M

### 【作者名】

アマノン ジャック

### 【あらすじ】

昔々ある所にシンデレラという少女が住んでました。

以前書いたのを連載化しました。

9/6更新と共にタイトル変更しました。つゝかこれもつ逆襲ってレベルじゃない…

10/12始めの2話以外は消しました。書き直す予定です。やは

りちゃんと決めてから書かないといけませんね…

掃除の時間(前書き)

キャラ崩壊注意

## 掃除の時間

「姉さん達、掃除するからそこ退いて下さい。」

「ああん？」

掃除中のシンデレラは姉達が邪魔なので注意した。しかし姉達はシンデレラの態度が気に入らないらしく退こうとはしない。

「てめえ、シンデレラ…誰に向かって口を聞いてやがる？」

姉Aがシンデレラの服を掴み口答えする。

「お姉様達です。」

姉Aの態度に恐れず淡々と答えつつ姉Aの掴んだ手を退ける。

4

「そう、「姉」という事は私達はお前より立場が上って事…」「  
「そうですね。」

姉Bが姉Aの意見に加わる。シンデレラは姉Bの意見にしれっと同意した。

「何だ？その態度は！ムカつくんだよ！！」

姉Cがシンデレラに殴り掛かってきた。

「ふう…やれやれ。」

シンデレラは姉Cに呆れながら攻撃を交わす。交わされた姉Cはそ

のままの勢いで壁に激突した。

「コノ！やりやがったな！！」

（そっちが勝手に攻撃して自滅したただけでしょ？何で私のせいになるのよ？）

姉Bが姉Cの自滅を見てシンデレラに怒り襲ってきた。シンデレラは心の中で呆れながら姉Bの攻撃を交わす。

だが、

「はん…馬鹿め！」

交わした所に姉Aが構えて反撃してくる。

（ああ…うぜえ。もう良いか。）

姉Aの攻撃がシンデレラの頭に届く瞬間…シンデレラは逆に姉Aの腹を殴りかける。

「!?!?」

姉Aは驚き攻撃を止め避けようとしたが…

「遅いです。」

シンデレラの方が早かった。姉Aはまともに喰らい地面に叩きつけられた。

「もう、お姉様達たら。毎回飽きもせず私に攻撃してきて…元氣

なのは宜しいですが、有り余りすぎですよ?」

何事も無かったかのように笑顔で言うシンデレラ。

「だから、嫁の貰い手が居なくなるんですよ。」  
グサッ!

姉達は精神ダメージを受ける。

「良い年なんだから、良い加減お転婆も卒業して下さいね?」

グサグサ。

更に精神ダメージが加わる。

「あゝ、もしかして…私に嫉妬されてます?私、まだ若いですもんね…。」

「おい、調子扱くなよ…。」

シンデレラの言葉に姉Aが反論する。しかし精神ダメージが未だ響いているので弱気な姉A。

「あら?事実を言ったままででしょ?もう年もサバ読んでも無駄なくらい老けてるんだから年相応に大人しくするのが的確だと思いますが?」

グサグサグサ。

姉達の精神を更に追い詰めるシンデレラ。

「……。」

姉達はもう反論する元気が無い。静かになった姉達を見てシンデレラは掃除を再開しようとする。

「では、掃除するので退いて頂けますか？」

黙って部屋を出て行くこととする姉達…そこへ、

「此はいったい何の騒ぎです？」

中年の女性が物音に気付き駆けつけてきた。

（また、面倒なのが来た…）

「お母様！」

シンデレラは肩を竦めながら女性…継母を見る。その女性に駆け寄る姉達…

「シンデレラが虐めるの！」

「私達はただ話してただけなのに…」

「早く懲らしめて！」

口々に勝手な事を言い出す姉達…

「まあ！シンデレラ、どういう事ですか？」

継母は大袈裟に声を上げる。継母を見てウンザリするシンデレラ。

「私はただ掃除をしようとしただけですが？」

「本当に？でしたら何故、子供達は泣いてるのかしら？」  
(子供達って…良い年して、此だから馬鹿親は…)

シンデレラは正論を述べたが、継母は怪訝そうに見る。そんな継母を見て心の中で毒づくシンデレラは溜め息を吐いた。

「兎に角、私は掃除するんで皆さん退いて下さい。」

「ちよつと！私の質問に答えなさいよ！！」

更に声を荒げる継母にシンデレラは…

「…ったく。さっきからうるせえな。」

「何ですって！」

「五月蠅いって言ったの。聞こえなかった…おばさん？」

急に口調が変わり本音も言うようになったシンデレラに継母は信じられない顔で見ている。

「き〜！何よ、その態度！！」

「ちよつと、いちいちデカイ声上げないでよね？幾ら自分の耳が遠いからって私に超音波をぶち撒けないでよ。」

「むき〜！！」

怒りの余り叫ぶ継母。

「もう許せませんわ！こ〜なったら追放してあげますわ！！」

最終手段とばかりに宣言する継母にシンデレラは余裕の態度で反論する。

「どうぞ、御自由に。」

「ふふふ…。路頭をさ迷って後悔するが良いわ！」

勝ち誇ったように笑う継母にシンデレラは…

「ああ、でも私が出て行ってゴミ屋敷って言われても知りませんから。」

「別にお前が居なくても使用人が…」

「知ってますか？」

継母の言葉を遮りシンデレラは続ける。

「使用人はこの屋敷に居ないんですよ？」

「は？どういう事？」

「其れはですね…貴女達の高飛車な態度に耐えきれず皆、辞めていったのですよ…あの程度で辞めるなんて骨の無い奴ら…。」

キョトンとする女達を差し置いて一人笑うシンデレラ…

「まあ、仮に私が出て行って使用人を募集しても誰も来ないと思いますけど？」

「そんな事無いわよ。給料だって…」

「高収入でも此処で働くくらいなら他に رفتった方がマシだと思いませんよ？」

ワザとらしく、

「…と“元”使用人達が申しおりました。」

「……。」

「さて此処で問題です。使用人が居ないという事は誰が貴女達の…」

飯など世話をするのでしょうか？」

沈黙。

「答えられないのでしたら、用はありませんね？では…」

「待つて！ゴメンナサイ！！シンデレラですわ！！！！」

慌てたように答える継母に意地悪っぽく…

「シンデレラ：“様”でしょ？継母様？人に物を頼む時は礼儀を弁  
えると習いませんでした？」

「だ…誰が、貴女なんか…！！」

「あら？別に私は良いのですよ？どちらでも…ただ困るのは貴女達  
ですから、関係無いですし。」

「くっ…！！」

「な…に？その態度？」

すっかり立場が逆転したシンデレラと継母。

「ほら、早く。シンデレラ様辞めないで下さい…って言ったらどう  
？」

「うっ…！！」

娘達の手前、下手には出られない継母。

「もう焦れたいな。とっと、言えよ？」

「……！！」

悔し涙を流す継母。そんな継母を見ても冷徹なシンデレラ。

「あれ？泣いてるの？…泣けば誰かが助けしてくれると思ってる訳？」  
「ちよっ…シンデレラ。」

継母の様子に耐え切れず庇うように制してきた姉達。

「言い過ぎよ！」

「妹の分際で！調子乗らないでよ！！」

姉達はシンデレラに反論するが…

「はあ？調子に乗ってるのは貴女達でしょ？此でも優しくしてる方だけど？」

「此の何処が優しいのよ！」

「え？もしかして…厳しい方が良かった？」

「シンデレラ！」

姉達の意見に鼻で笑い飛ばすシンデレラ。

「もう一度頭の悪い貴女達に言いますね。私はどちらでも構わないの。早くお願いしたら？」

「…うぐー！」

「簡単でしょ？それとも私に頭を下げたくないのかしら？」

シンデレラは再度女達に忠告する。すると…

「…お、お願いします…。シンデレラ…様。ど、どうか此処に、居て下さい。」

継母だ。シンデレラにしどろもどろながらも土下座しながら小さな声で言っ。

「まあ、継母様。顔を上げて下さいな？お姉様達が見てますわよ？」  
クスクスと笑いながらワザとらしく敬うシンデレラ。言われて顔を上げた継母は顔を真っ赤にしながらシンデレラを睨む。

（覚えてなさい！シンデレラ！！）

すると視線に気付いたシンデレラは継母の頭を足で地に着け始めた。

「…でも、視線が気に入りませんね。それに声が小さいです。」  
「なっ！」

「はい、では気を取り直してもう一度！」

継母を踏みつけながら言うシンデレラ。

「嫌よ！言うわけないじゃない！！！」

そんな意見にシンデレラは冷たく…

「あら？今なら貴女の頭を潰せるんですよ？」

「！！！」

「此はもう、脅しじゃない事くらい分かりますよね？」

足に力を込めると下から情けない声が聞こえた。

「ほら？早くしないと貴女達の大事なお母様が潰れちゃいますよ？」

今まで声掛けなかった姉達に命令するシンデレラ…

「それとも、自分の方が大事？」

「は、早く、シンデレラに……」

「誰が呼び捨てしろって言ったの？」

継母が悲鳴に近い助けを娘達に上げる。シンデレラは継母の態度が気に食わなかったらしく更に力を込めた。

「痛い痛い痛い！」

「ねえ？黙ってても意味無いでしょ？さっさとしなさいよ！」

痺れを切らし始めたのが口調が荒くなっていく。

「もう一つ貴女達には関係無い事を言いましょうか？」

ビクッと強張る姉達。

「明日、ゴミの日なんですよね。」

「……！！」

「言ってる意味解りますか？」

すると姉達はそれぞれの視線を合わせシンデレラに……

「無礼な態度を取り、申し訳ありませんでした！シンデレラ様。どうか愚母を解放して下さい……！！」

姉達は土下座しシンデレラに言う。

「合格です。」

シンデレラは継母を解放した。解放された継母に急いで姉達が駆け

寄る。シンデレラを睨みながら…

「もう、嫌だな。冗談ですよ？さっきの…」

信じられないという顔の女達。

「殺す訳無いでしょ？犯罪者に成り下がりがりたくないし？」

何事も無かったように掃除を再開し始める。

「…という事で退いて頂きます？」

こうして、シンデレラは無事掃除をし始め数日後には王子様と結婚しましたとさ。

王子と…（前書き）

あれから数日後、嫁いだシンデレラは幸せそうに暮らしているように見えたが…

王子と…

「お願いします。王子様、私をあの城に帰して下さい！」

シンデレラは王子に頼み込む。あれから数日後、急に決まった結婚。シンデレラ本人が知らないうちに継母が勝手に嫁がせたらしい。

（あの…ババア。余計な事しやがって…）

納得してないシンデレラにとっては苛立ちを感じるばかりだった。

（そーいや、嫁ぐ前…妙に生き生きしてたな…まあ良いわ。この馬鹿王子を説得してお仕置きしてやらなきゃね？）

内心の黒さを表面に微塵も出さずに王子を説得する。しかし、王子は…

「ならぬ…」

「何故ですか？私が帰らないとあの城は使用人など居ないのでしょ？」

「姫であるお主が其処までしなくても良からう？第一、使用人など私の城から出せば良い。」

「しかし…」

「駄目だ。」

なかなか折れない王子にシンデレラはやや苛立つ。

「それに聞いたのだが、あの城は最近新しい者を雇ったらしいぞ？」  
「え？」

初耳だった。

（あの城に新しい使用人が？…ふん。ますます帰りたくなってきたじゃない。）

実は使用人が辞めた原因はシンデレラのねじ曲がった性格とイジメだったのだ。

（どんな奴かしら？…ふふふ。）

「…という訳で駄目だ。」

王子が理由を話していたが聞いていなかった。いや、もう聞く気もなかったというべきか…

「何処へ行く？」

「実家に帰ろうと思ひまして。」

「先程、駄目だと言った…」

「別に貴方の意見など聞いてませんが？」

王子の言葉を遮るシンデレラ。

「どうして、そんなに帰りたがる？」

「決まってるじゃないですか。」

今まで王子の前では見せなかった悪魔のような笑顔で…

「アイツらを屈服させる為ですわ。」

「…お主、そんなに憎んでいるのか？」

憎んでいると思われる矛先は勿論、継母親子。だがシンデレラは意外な返答をする。

「憎い？誰が？あ、もしかして勘違いされてます？」

「？」

「ウフフ…アイツら反応が面白いんですよ。良い年して落ち着きが無いし。」

シンデレラの瞳が妖しく光る。サディスティックさを増しながら…

「つい、からかいたくなるんですよ？…コレで良いですか？理由…」

「…うらやましい。」

「…私、貴方のそういう所が嫌いです。」

王子の一言に心底ウザがるシンデレラ。

「…という訳で実家に帰らせて頂きますか？馬鹿王子様。」

「もっと！」

「黙れ…変態王子。（…ああ、やっぱり屈服させなきゃ良かった…

寄りによって目覚めやがって。」

「うう…もっと私を罵ってくれ！」

変態と化していく王子を冷めた目で見ながらシンデレラは呆れている。

「もっとしないと実家へは帰さないぞ？」

「はあ、ヤレヤレ…まあ、目覚めたのなら仕方無いか…」

ぐしゃり。

花瓶を片手で握りつぶし粉碎するシンデレラ。流石の変態王子も驚いてしまう。

「…シンデレラさん？」

「貴方がいけないんですよ？せっかく畏まったのに…でも…」

口角を上げ綺麗で妖しい丹の笑み。

「少々、度が過ぎましたね…私、変態をさらに屈服させるの初めてなんですよね？」

「…冗談キツくないか？」

「冗談だと思えます？…さて、どうしてやるうか？」

「ひい。」

王子はシンデレラから離れていく。

「逃げなくても良いではありませんか？貴方の望み通り罵って差し上げようとしていますのよ…」

「く、来るな！」

「あら？来るなど言われると余計に行きたくなりますのよ？」

王子が後退りする。シンデレラがゆっくりと前進して行く。

「もう、壁ですね。どうします？」

「…うあ。」

シンデレラが王子の前まで来てしゃがみ込み、頭を持ち…壁に擦り付けだした。

「痛い痛い。」

「あらあら、おかしいですね？貴方のようなド変態にも痛覚はあったようですね？」

「もう、分かった…実家に帰って良いから！止めてくれ。」

止めるどころか寧ろ力を込めるシンデレラ。ミシミシと軋む音が王子の耳に届く。

「今更遅いですわ。あの時、止めずに行かしておけば良いものを…」

「ちょ…死ぬよ。コレは！」

「大丈夫ですよ？人間そう簡単に死にませんから…それに力加減な自信がありますし。」

「…！」

王子は恐怖のあまりに泡を吹いて気絶した。

「ちっ！もう気絶しやがったか…コレだからボンボンは…！」

気絶した王子を見ながら部屋を出て行くシンデレラ。

「サヨウナラ。変態王子様。」

扉を閉めて実家に向かうシンデレラ。部屋に取り残されたのは泡を吹いて気絶する王子だけだった。

こうして、シンデレラは王子を屈服させ実家に戻って行きましたと  
な。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6365m/>

---

シンデレラ無双

2011年10月7日09時21分発行